

ごあいさつ「医療福祉という概念」

川崎医療福祉学会誌は創刊以来、「医療福祉およびその関連領域の学術的発展に寄与する論文を掲載すること」を目的として今日に至る。これまで掲載されてきた多くの論文から、医療福祉がさまざまな領域の学問領域を基礎として成立するものであると感じることができ、その意味では多様性に富んだ学術雑誌であったことに異論はない。その果してきた役割は評価に値するものであろう。しかし一方で、今後の川崎医療福祉学会のさらなる発展、ならびに医療福祉学研究的の質的充実といった点も考える必要があり、真正面から「医療福祉学」と向き合う使命が本誌には常にあるものと心得なければならない。これが、医療福祉学のランドマークとなるような総説を「学会誌増刊号」として発行することになった経緯である。今後、川崎医療福祉学会の目指す方向は少しずつ鮮明化するであろうと思う次第である。

川崎学園の創設者川崎祐宣が、「医療福祉」という概念を実践に移したといわれるが、その理論は残念ながら文字としては残されていない。しかしながら、この言葉は全国的に広がり、いくつもの大学でこの学問構築が行われようとしてきている現状であろう。江草はこうした現状に対して鋭く指摘する。1つの目的に向かって知の体系化を目指すのが university (総合大学)であり、単に保健、福祉、医療それぞれの分野の職業人を養成する連合？大学ではなく、医療福祉の本質についての深い洞察と思索が大学教育の根底には必要であるとの指摘である。そして岡田は、医療福祉とは「医学モデル」と「社会モデル」の双方を重視するという人間の理解の仕方に等しい概念であると提言し、その詳細を論理的に展開している。これら2つの総説は、わかり易い言葉で「医療福祉学」の理解を読者に促す内容であるとともに、医療福祉学研究・実践の責任の重さを痛感させられる重厚な内容となっている。

また、飯田、佐々木、大田、太田、三田には、それぞれの専門分野から医療福祉学を鋭くえぐってもらうことを期待して、原稿を依頼した。飯田の「社会福祉の倫理」では、ギルガメッシュの叙事詩や旧約聖書、あるいは古代ローマやギルト社会といった人類の歴史を社会福祉の源流という観点から細解き、そして現代の社会福祉のひずみに至るまで、共同体倫理の観点からえぐられている。健康上の理由から加藤と矢野がお手伝いさせていただいた経緯も含めて、飯田の深い思いを味わっていただきたい。

佐々木は、最も得意とする子どもと社会(家庭、学校、社会)の関わりという視点から子どもたちの医療福祉問題を取り上げた。日本人のコミュニケーション機能回復の必要性をエリクソンの研究とともに、実践例もあげて述べられている。次世代を担う子どもたちへ、佐々木の熱い思いと、実行力を感じる。

この特集では、政策・制度・法律といった「公」の立場からの医療福祉について太田に深く語ってもらっている。政策・制度・法律の歴史を細解いても「医療福祉」の概念形成がなされていないと指摘した上で、社会保障制度の観点から「医療福祉」を「健康で安心できる生活の保障」と見事な定義づけをしている。今後さらに議論を重ね、「公」政策・制度・法律に「医療福祉」の概念がより鮮明に反映されていくことであろう。

現代社会は、コンピュータに代表される情報機器の普及に依存した社会である。したがって、情報機器と医療福祉との関わりに関する問題は避けて通れない。大田はコンピュータとは高齢者や障害者には程遠い存在ではなく、福祉機器としての利用価値が今後さらに拡大されると述べる。さらに、三田は、情報通信技術を活かした在宅ケア支援について実例を挙げながら、情報通信技術の医療福祉への貢献の可能性を実証している。

この「医療福祉」という概念が、それぞれ専門の異なる学識者によって述べられた本特集は、これに完結することなく、さらに続けて続編が組まれていくものであり、大いに期待される。

宗教家であり倫理学者であった関谷は、修行の一環として入院患者を見舞うということがあったという。ベッドサイドに座ってひたすら患者の言葉に耳を傾ける。仮に患者が一言も話さなかったとしても、それはそれとしてその日は帰るというものであった。このじっと耳を傾ける、相手を理解しようとするときの根幹の思想を伝えているようだ。人の心はスペクトルのように日々変化する。相手を完全に理解することは不可能に近いが、その時々人が欲することを少しでも理解することは可能になるであろう。医療福祉学とは、人間性の尊厳、人権擁護あるいは人権保障として地球上の同じ生命体として捉えるような思想が根源にあって、今日最も必要とされる教育あり、学問であると信じたい。

日頃、既に医療福祉という思想を持って教育、研究、そして社会活動に貢献されている著名な方々に一度立ち止まり、それぞれの研究分野から医療福祉を考え、有意義な特集「医療福祉学展望」を発刊することができ、衷心より感謝申し上げます。

平成19年6月吉日

加藤保子
前 川崎医療福祉学会誌編集委員長
矢野博己
川崎医療福祉学会誌編集副委員長